2017 年度　関西学院高等部　学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長、中学部部長、評価情報分析室副室長、から「第三者評価／学校関係者評価」をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成 28 年改訂）で示された学校運営における 12 分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「教育環境整備」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「人権教育」、2015 年度より共学になったことに伴い、これまでとは異なる女子生徒への指導が始まったことを踏まえて「生徒指導」を継続して設定しました。また、2014 年度より文部科学省から採択を受けたスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）に関連して「国際理解教育」も継続して設定しました。

2017 年度の学校評価の実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒 99.3％（前年度回収率 99.3％）保護者 75.7％（前年度回収率 74.1％）教員 100％（前年度回収率 100％）でした。

今年度も各項目を生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2018 年 3 月 9 日
関西学院高等部
部長　枝川　豊

学校評価

教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う。」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、またその学びの目的を他者に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2014 年度より文部科学省に採択されたスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）事業を軸に国際感覚を身につけた人を育成をする。

2017 年度の評価項目

●キリスト教主義教育の実践:高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
●教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているかの検証のために評価項目として設定している。
●生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
●教育環境整備：共学化の完成年度を迎え、生徒数増加、女子生徒の増加に対応するための設備を整備することは重要であり、快適な学習環境を保証するために評価項目として設定している。
●人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
●国際理解教育：ＳＧＨ事業が４年目を迎え、生徒の国際理解への姿勢を図るため、この項目を設定している。

2017 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 今年度の生徒のキリスト教主義教育に関する評価は、生徒質問１「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」67.2%（昨年 70.2%）、質問２「礼拝の時間は大切だと思う」73.4%（昨年 72.1%）、質問３「聖書の言葉には共感できる部分がある」71.4%（昨年 72.7%）であった。昨年度と大きな差は出ていないので、現状維持と評価してよいと考える。ただ、若干だが、数字が下がっている理由として考えられるのは、宗教的な活動の中心となる生徒の人数が減少気味にあることだろう。これは、例年行っている有志のバイブルキャンプの参加者が、昨年度 11 月開催時には 32 名だったが、今年度は 23 名であったことからも分かる。また、女子生徒のキリスト教主義教育に関する評価が高い。バイブルキャンプの参加者も宗教部員も圧倒的に女子生徒が多い。 ● 自由出席である早朝祈祷会（火曜日 8：10）の出席状況は、平均出席 120 名（昨年度 150 名）だった。求めている生徒が多いことは感謝である。 ● 生徒質問４「キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」については、58.9%（昨年 63.4%）であった。子ども会、ボランティア委員会などの活動にも継続した充実さが見える。保護者の肯定的な回答の割合は 80.7%（昨年 82.5%）と相変わらず高い。保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」の出席者数が、安定して多いこともつけ加えておく。		

今後の方策	● 現状維持という評価を受けて、現在の方向性をベースにしつつ、更にチャペルのあり方、キリスト教行事の工夫などを検討したい。1,200 名でのチャペルになり、静けさの確保に大きな課題を残しているが、ここがすべての出発点であるように考える。また、宗教的な活動の中心となる生徒の育成に、更に力を入れ、彼らを中心に、輪を広げていきたい。

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【接続する大学が求める学力を保証する学習指導の実践】	自己評価	A
目標	● 接続する大学で学ぶ力を保証し、社会の要求に応えうる総合的知識を習得する。具体的には１．基礎学力の向上、２．興味や関心に応じ深く学ぶ、３．知の統合を目標として掲げる。 ● その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。 ● 教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 近年、英語・数学・国語の週課題や宿題等の質・量を充実させた取組を行っている。それが功を奏し、生徒質問７、８、９、10 などの、主に生徒の学力がついているかという質問において、70～80%の肯定的な回答を生徒と保護者から得ることができた。特に、生徒質問８「授業内容を理解することができている」は 81.0 %で、昨年度とほぼ同じである。このことより、基礎学力の定着に結び付いているという実感につながっていると思われる。学力向上のための取組について概ね、順調であると考えられる。 ● 英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取組を数年続けている。その結果、生徒質問 12「補習や課題は適切に行われている」が 76.5%で昨年度と同じく比較的高い肯定的回答を維持することができた。 ● 昨年度より、各学年に対し進路説明会を適切な時期に行った。その結果、教育課程の説明（進級・推薦・卒業）に関しては、生徒質問５、保護者質問２、教員質問 10 において、80～90%の肯定的な回答を得ることができた。 ● 接続する関西学院大学に関する情報の提供に関する質問においても、生徒質問 13 の 79.4%、保護者質問６の 77.5%から肯定的回答を得た。今後、2018 年度入試より関西学院大学の各学部に推薦する最大数が変わる。また、大学が求める英語力も外部英語試験を基準としたものに変化する。これからも生徒や保護者が望む情報提供を十分にする必要がある。		
今後の方策	● 学力向上をめざす取組を教科委員会を中心に、学校全体で進めて行く。 ● 基礎学力の定着をより一層進めるため、英語・数学の特別授業・宿題指導継続・強化する。 ● 教育課程の説明（進級・推薦・卒業）については現在の取組みを継続し発展に努める。現１、2 年生の大学進学に関する十分な情報提供のあり方について、提供する情報の内容と時期について教務部で検討する。		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【気持ち良く学校生活を送るための生活指導の徹底】	自己評価	B
目標	学校生活のルールを守り、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 共学化完成年度として、誰もが心地よく学校生活を送れるようにルールの順守、マナー教育に取組むべく、先生方のみならず学友会にも呼びかけ協力を得てきた。特に制服の着用の仕方について月に１回、学友会に設けられている管理委員会と「登校時の制服の着用について、プライドを持った制服の着こなし」について話し合いを行った。その成果もあり登校時の違反者が１桁台と減少した。また、自転車通学の注意喚起に際しても「安全面」について強く伝え「高等部敷地内では自転車を降りて動かす」ことも徹底が浸透した。 ● 「守るべきルールやマナーを明示し、日々の指導をきめ細かく行っている」の回答に際し、教員の否定的な回答が前年度より多くなっていることは、学友会として反省すべき点であり、意見を集約し次年度以降に改善していかなければならない。また、生徒質問 15「挨拶・時間厳守・美化など高等部生活の基本が適切に指導されている」において 30%以上が明確ではないと回答していることから、日常からの注意徹底も必要である。 ● 生徒質問、保護者質問の回答に際し、前年度とほぼ変わらない数字が出ているが、その数字を満足度と捉え、さらに高い数字が表れるよう取組んでいく必要性がある。また、男女比についてはほぼ同様の回答が得られていることから、平等に指導の対応がされているものと推察される。 ● 生徒を守る上で必要不可欠である教員、保護者間での連携は年々向上していると思われる。		
今後の方策	● 「自治」を育ませたうえで、高等部が求めるマナー向上を徹底する。制服のデザイン変更を女子生徒が求めるなか、男女ともに着こなしを再確認し登下校時のマナーも含め、ルールを順守させるよう導いていく。また、次年度より新入生には iPad を持たせるが、スマートフォンを含めその利用、保管の仕方においても自覚を促したい。 ● 礼拝を含め全校生徒が集まる機会が多い中、集団での個人の役割を認識し、けじめのついた行動を身につけさせる必要がある。 ● 毎年学校としていじめを許さない姿勢を強く示しているが、生徒の細かい変調にも気を配り、生徒との信頼関係を構築し続け、様々な問題があれば早期解決に取組む。 ● 学校、家庭との連携はさらに密に取り、教員間での報告、連絡も徹底し生徒がさらに安心して過ごせる学校生活、環境を提供できるよう取組んで行きたい。		

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【共学化に伴う学校設備の準備・改善】	自己評価	A
目標	●男女共学、定員増に対応した施設・設備の充実を図る。 ●ＩＣＴ、アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境を整備する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 2010 年度からの高中部整備充実計画により、男女共学・定員増に対応した設備の整備を順次進めてきた。2014 年度高等部本館改築、2015 年度新体育館建設、2016 年度各メディア教室用ＰＣのリプレース、そして共学化が完成した今年度も、これまでの整備を検証した結果を踏まえて、本館・体育館等で適切な整備を行った。その結果、高等部の教育環境整備全般について、生徒(質問		

	19～21)、保護者(質問 12～13)、教員(質問 28～32)ともに例年通り 80%を超える高い肯定的評価を示している。概ね本校の教育環境の整備が順調に進められていると判断して良いと考えている。 ● 更に今年度は、昨年度抜本的な将来計画を立てたＩＣＴ環境について、計画に基づき大規模な整備を行った。具体的には、全館の無線ＬＡＮ化・全普通教室への電子黒板機能付きプロジェクター設置・教員へのタブレット端末の配備を実施した。またハード面だけでなく、教員間コミュニケーションの基盤となるアプリケーションの導入や、関西学院大学とも連携したアクティブラーニング型授業の研修も実施し、校務の効率化と授業改善を推進できる体制づくりに努めた。 ● 上記の整備を行った結果、今年度は教員の 98.1%がＩＣＴ環境について肯定的評価をした（教員質問 33)。これは、ここ数年間の本アンケートのＩＣＴ環境についての評価において、生徒は肯定的な回答をしていたのに対し、教員が否定的回答をしているのが特徴であったこと（昨年度生徒質問 21 の 93.0%が肯定的な回答なのに対して、教員質問 33 の 42.9%は否定的な回答）を考えると、大きな進歩だと考えている。
今後の方策	● 来年度も引き続き、現在の充実した施設・設備の良好な維持、管理を行うと共に、生徒の意見を尊重しながら更なる整備・充実を行う。 ● 来年度の１年生から、生徒も１人１台のタブレット端末を持つ環境となる。今年度のＩＣＴ環境整備とワーキンググループの教員を中心とした様々な試行を踏まえて、更なるアクティブラーニング型授業・ＰＢＬ(Project Based Learning)型授業を推進し、高等部らしいアクティブラーナーを育成していくための体制を整えていく。

評価項目 【テーマ】	人権教育 【人権意識の涵養と日常における実践】	自己評価	B
目　　標	● 情報化やグローバル化の進展に伴って多様化･複雑化する様々な人権課題を、自らの問題としてとらえ、仲間と共に考える。また日常の中で、自他の人権を尊重する生き方の実現にむけて、具体的に行動する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 昨年度に人権教育推進委員会で協議を重ねた結果をふまえ、今年度より「双方向性」と「日常性」をキーワードにした新たな人権講座を実施している。まず多岐にわたった人権講座の項目を、体育科(保健)・家庭科・情報科・聖書科とも連携しつつ整理して絞り込み、１年生では「いじめ問題」、２年生では「多様性と差別の問題」、３年生では「日本と世界の貧困問題」を核にして扱うことにした。形式も、従来の学年礼拝の時間帯（10:20～10:45）を用いた講義形式の人権講座に加え、「自分で考え、他者とその考えを分かち合う」ことに主眼をおいた「人権ウィーク」を試みた。具体的には、①全体会で担当者による発題（問題提起）→②ホームルーム教室でワークシートに自分のコメントを書く→③４～５名の男女混合グループでの分かち合い→④意見集約・全体のまとめ（担当者よりコメント）を１サイクルとする活動を、短期集中で実施した。初の試みであり、どのような「問い」を投げかけるか困難であったが、学年やＨＲ担任との協力体制のもと、多くの生徒が熱心にワークシートに取組んでいた。グループの分かち合いに関しても、グループ間で温度差はあるものの比較的活発で、時間不足を感じさせる状況であった。		

	各グループから上がってきた意見は集約して全体会で発表し、コメントを加えた。また、事後には、生徒に対して「評価シート」を配り、その回の講座に対する４段階の評価や意見・感想を書いてもらった。それによると、グループの分かち合いに対する生徒の評価が最も高く、「これまでにない形式だと感じた」「自分と違う他者の考えが知れて良かった」という声が多く寄せられた。また、発題者やコメンテーターには、本校卒業生の福祉施設職員や、大学生ボランティア、ＮＧＯスタッフなど多岐にわたる方々を外部からお招きし、貴重なお話を伺うことができた。今回の学校評価アンケートで生徒質問 24 と教員質問 38 の「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」という評価項目に対し、前年比 10 ポイント増の 69.3%の生徒、92.2%の教師が肯定的な評価をしている点は、その一つの成果といえる。しかし、問いの立て方やフィードバックの仕方において、新たに浮かび上がった課題も多く、まだ道半ばといった感がある。また、せっかく人権講座で学び考えたことが、どれだけ生徒の人権感覚や日常生活に力を持ち得ているか、更なる検証が必要である。 ● ９月に生徒・保護者を対象とする「いじめアンケート」を実施した。アンケートで指摘された内容は多岐にわたったが、学年団・人権教育推進委員会・生徒部・カウンセリング委員会が必要に応じて情報を共有し、可能な限り丁寧な対応を心がけた。 　学校評価アンケートでは、生徒質問 23「いじめのアンケートや人権講座・情報科の授業・ホームルームでの取組み等を通して、高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取組んでいる」という項目に対し、例年比微増の 70.3%の生徒が肯定的に答えているが、十分でないと感じる生徒も 29.8%存在している。「いじめアンケート」そのものを更に見直すと共に、日常のホームルーム・クラス経営で、生徒の様々なサインを見落とさず、見つけた際は迅速かつ丁寧なチーム対応が求められる。
今後の方策	● 試行錯誤であった 2017 年の取組みを受けて、2018 年は「双方向性」を重視した「人権ウィーク」の取組を更に充実させる。そのために人権講座の長期計画をしっかり立て、自分の考えをしっかり深めて仲間と分かち合い、全体のまとめを受けてもう一度考えを深める時間を確保したい。 ● いじめアンケートを更に見直し、大学で「いじめ問題」を研究している教員とも連携して教員対象の研修会を実施する。また、教室のＩＣＴ化、新入生徒の iPad 所有に対応し、生徒部や情報科とも連携してＳＮＳによるトラブルやいじめ・人権侵害の防止につとめる。

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な問題への取組意欲・関心の向上】	自己評価	A
目標	● ＳＧＨのプログラムとしてのＧＧＰ（全生徒対象）を通して、世界共通の価値観や世界規模の課題に対応する姿勢を育み、また同時に異文化理解を深める。 ● 国内外で開催される国際交流プログラムへの積極的な参加を促す。 ● 短期・中期・長期留学希望、海外渡航の意欲を育成する。 ● 受け入れ留学生の数を増加させ、学校内での国際交流の場を提供する。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	● 2014 年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）の指定を受け、ＧＧＰ（General Global Program 全生徒対象）、ＧＬＰ（Global Leader Program 選抜された生徒）と二層の教育プログラムを実施しており、今年度は４年目を迎え、次年度の最終年度前の各プログラムに対しての修正		

時期でもあった。

- ＧＬＰについては 1 年生対象のＧＳＩ（Global Study Ⅰ）と２年生対象のＧＳⅡ（Global Study Ⅱ）は、継続して世界を知り、グローバルな課題を解決・実践する力を身につけることを目標とし、週１回の放課後に１時間授業を行った。授業は大学教員を中心に高等部の教員が協力して行い、基本的に授業や生徒のプレゼンテーションもできる限り英語で行い、実践的な場で英語を使用する機会を与えることができた。昨年度と同様、ＧＳＩとＧＳⅡが座学中心な傾向があり、実際に学校外で行動を起こしていく機会が不十分である現状も、様々なＳＧＨ関係で募集される全国プログラムに応募し、その準備をし、公の場で発表する機会を与えられることで解消された。また３年生の選択科目として開講されて２年目のＧＳⅢ（Global Study Ⅲ）の授業においては、さらに工夫がみられ、生徒達の自主的な活動を促し、外部への発信を試みる機会が昨年度以上に多く与えられた。
- 昨年度同様、ＧＧＰとしての開催する講演会の数を絞り、その分生徒達に講演の内容を十分に消化する余裕を与え、また学年として取組めるプログラムの充実化を図った。２年生は、校外ＨＲでグローバルなテーマをもとにディベートを行い、また 1 年生は、クラウドファウンディングをテーマとしてＳＧＨの年間成果発表会でポスター発表を行った。
- 今年度のアンケートの生徒質問 25「国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる」については、昨年度は全体での肯定的評価は 67.9％であったが、今年度は 69.2％と増加がみられた。また同質問を男女別に比較した場合、全男子生徒では昨年度は 66.1％が「感じる」と回答したのに対し、今年度は 65.0％と大きな変化はなく、一方で、全女子生徒では昨年度（１、２年生のみ）で 70.5％であったが、今年度は 74.8％と大きく上昇し、全共学化が完成し、全女子生徒の国際問題への意識が高まってきているといえる。
- 教員質問 39「生徒の国際的な諸問題（国際協力、環境問題、紛争など）への関心を高める努力をしている」については、肯定的評価は昨年の 95.9％から 90.2％と下がっており、これは学校で実施されている国際理解教育、ＳＧＨや他の国際交流プログラムが教師全体に浸透していなかったことが反映されている。また保護者については保護者質問 16「生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている」について全体では「努力をしていると思う」が、昨年度の 77.4％から 73.3％とその割合は低下しており、学校の国際交流に対する取組みの情報共有が十分でなかったといえる。また同質問に対し、男子の保護者は 71.6％、女子の保護者は 75.7％と、男女の保護者で捉え方の差がみられた。
- 生徒質問 26「語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」については、生徒全体で肯定的評価は昨年度の 77.7％から 75.8％に、男女別では、男子生徒全体の回答で肯定評価は昨年度 77.7％から 74.7％に、女子生徒全体では、昨年度（１、２年生のみ）76.3％から 75.9％（全学年）にと本年度は肯定評価がどの分類でも割合がわずかに下がっている。このことから、以前からの各種国際交流プログラムやＳＧＨについて、学校全体への告知や情報共有が不十分であると感じられていることがわかる。
- 教員質問 40「語学力を含め、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」においては肯定的評価が昨年度の 93.9％か

	ら 100%となり、教員の理解が完全になり、保護者質問 17「語学力向上を図るとともに、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している」については、昨年度の 74.1%から 71.9%とその肯定的評価の割合は下がり、男女別で男子保護者は 70.2%、女子保護者では 74.3%と、保護者質問 16 と同じく、男女の保護者の間に捉え方の差がみられた。教員と保護者の間の受け止め方に開きがみられ、教員だけの自己満足ではなく、保護者と生徒達へプログラムの意義を強く説明していく必要がある。 ● 生徒質問 27「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている」についての生徒全体の肯定的評価は、昨年度の 66.6%から 71.9%に、男女別では、男子生徒全体では昨年度の 64.3%から 67.2%に、女子生徒全体では昨年度（１、２年生のみ）の 72.7%から、完全共学化の今年度 79.8%に、全てに大幅な伸びがみられた。これはＳＧＨや各種国際交流プログラムが、身近な学校生活の中で頻繁に行われ、自分の周りの生徒達が参加していることが影響しているといえる。 ● 教員質問 41「生徒の留学や海外に行ってみたいという意欲を育んでいる」については昨年度 93.9%から 92.2%と肯定的評価に大きな変化はなく、保護者質問 18「生徒が留学や渡航したいという意欲を育んでいる」について保護者全体では、昨年度 63.6%から 65.5%と飛躍がみられ、男女別で男子保護者は 61.6%と女子保護者では 71.4%と、質問 16、17 と同じく、男女の保護者の間の受け止め方に大きな差がみられた。学校側も継続して、海外渡航や留学の意義や国際交流プログラムの参加の安全性や意義を伝え説明する機会を増やし、生徒達や保護者達に参加し理解してもらう努力を続けていくことが不可欠である。
今後の方策	● ＳＧＨのプログラムも次年度最終年度を迎えることになり、学校全体で国際理解教育に取組める体制がＳＧＨ終了後にも維持されるように、学校として対策していく必要がある。そのためにも教科横断型の国際教育の浸透と充実化が必須であり、またそのような学校の姿勢に対する保護者の理解と支援も不可欠といえる。昨年度に引き続き、全教員・生徒にＳＧＨの一環として実施されるプログラムを告知し理解を促し、参加まで導けるようにし、まずＳＧＨに携わる教員からの学校全体へ働きかける姿勢を確立し、最終的には一部の教員のみならず、全教員の意思疎通と理解のもとで進められるものとなるようにする。教科を問わずに、国際理解教育のワークショップを教員の研修として開催し、多くの教員に国内・海外フィールドワークの引率を依頼し、海外で実地体験できる機会を増やしていく。2018 年度新１年生は、全生徒がタブレットを所有することになり、学校からの情報発信を頻繁に行えるようになり、生徒達のみならず保護者とも情報の共有が容易になることが予想され、国際理解教育についての情報発信をさらに積極的に推進していく。 ● ここ数年の留学希望者の減少が中期留学制度の導入により改善され、留学者数を伸ばすことにつながっているが、その一方で留学機関に対する不信や不満も耳にするようになった。保護者の留学への理解を促すために、留学と各種国際交流プログラムについての説明会を、昨年以上に積極的に全生徒・保護者に告知し開催していく。国際交流部や英語科の教員のみならず、全教員が留学制度や国際交流プログラムについての情報を共有し、理解を深め、国内外で開催される国際交流プログラムへの参加、海外留学、海外渡航意欲を高めていく。

	● 毎年受け入れている留学生と生徒同士の交流は、校内での国際交流の一貫としては大きな意味を持ち、世界の中での自分の立場を認識し、世界の様々な国々の人々ともつながっているという感覚を養うために非常に重要な役割を果たしている。2017 年度は、４つの異なる留学団体から、出身国が異なる４名の留学生を受け入れる機会があり、引き続き学校としての積極的に留学生を受け入れる姿勢を維持し、そのためにも教務的な面のみならず、教員全体の意識の面においても高めていく必要がある。高等部の在校生のホストファミリー確保のための登録制度は依然確立しておらず、募集の工夫など対策改善に取組んでいく。

（自己評価）

A＋=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

キリスト教主義に依る教育における理解が生徒・保護者・教員ともに概ね共有できていると言えるが、ここが教育の根幹であるので、さらなる理解を深める努力が高等部として必要であると考える。

教育に関しては、内容理解のために工夫がなされた、魅力ある授業で、学習内容の定着を図ることを特に意識して教員は授業を行っており、生徒にも一定程度、そのような授業を受けていると感じていると解釈できる。さらに生徒の満足度を上げるためにも、来年度は本格的にＩＣＴ環境が整った中、新入生は全員 iPad を持つこととなり、大きく教育環境が変化する。教員の研修をそれに備えて毎週実施しているが、アクティブラーナーを育成する授業研究を深め、一層の授業の深化を図っていくことを進めていかねばならないと考える。

男女共学化完成年度となり概ね男子校からの移行がスムーズに行われ、特に昨年度より生徒の自治活動、自治意識も考慮して適切な指導がされている。これまでの反省を踏まえ、できるだけ早い初動での的確な対応、また一人ひとりの生徒を尊重していく姿勢を意識してそれぞれの案件に、チームとしての体制を以って対処し、男女生徒の別なく生徒指導面や部活動等も大きな問題には至っていない。また、保護者との連携についても概ね良好な関係が構築されていると考える。ただ、アンケートの結果にもあるようにルール、マナーの徹底にはまだまだ改善が必要であり、全校生 1,100 名を超える大規模校としての、これまでにない難しさも見えてきており、それらの問題への対応を来年度は考えていかねばらならない。

人権教育については抜本的な改革を今年度行い、まだ改革途上で正確な検証までには至らないが、種々の人権問題に対して、人権教育推進委員会、カウンセリング委員会がチームとして機能してきており、情報を教員間でしっかりと共有し、きめ細かく丁寧な指導、対応ができつつある。

４年目となったＳＧＨ事業は、昨年度構築した３年間通してのプログラムが順調に進んでいるが、生徒、教員の中で慣れも出てきて、関心がやや薄まってきていることがアンケート結果から見て取れる。運営組織の緊密な連携を図り、できるだけ多くの教員の参加、理解を深める機会の必要性を感じる。来年度は事業最終年度となるのでこの事業の成果を検証し、今後の高等部の国際理解教育にどのように継承していくか、今年度の結果を踏まえさらなる改善を要する。高等部として関西学院がめざすところのグローバルリーダーである「Mastery for Service を体現する世界市民」の育成にしっかりとつなげていきたい。

2017 年度の評価をふまえて 2018 年度に予定している評価項目、テーマ等

2018 年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、ＳＧＨ事業は指定最終年度になるので、ポストＳＧＨにつなげるための評価項目を「国際理解教育」の評価項目に加えて設定する予定である。さらにＩＣＴ教育環境が整い、iPad を教員・生徒が用いた授業を展開していくので、それらを検証するための評価項目の設定が必要となる。

第三者評価／学校関係者評価

共学３年目が終了する高等部から、いよいよ女子生徒も大学へ進学する年度を迎えました。高等部が大事にしているキリスト教主義教育は、例年通り高い評価があり、そのことを根底に、人を愛し神様に愛されて、大きな夢に向かって進学してゆく生徒たちの姿を心から楽しみにしています。

学習指導について、ＩＣＴ含めて十分な教育環境を整えてきており、また平素の授業だけではなく、高校生に対しても放課後の学習など非常にきめの細かい指導を行っていることが生徒や保護者に評価されていると考えます。高校生活の基本は学び、その姿勢が教員や保護者に伝わっているのであると考えます。教員間のアクティブラーニングの研修も前向きに取組んでおり、その成果が授業に発揮できている印象を受けました。

人権教育については、「人権ウィーク」の実践など、一方的な講義のみではなく、生徒たちが真剣に自分たちの問題として人権のことを考え話し合う取組は、数字以上に高く評価できるのではないでしょうか。

高校生の生徒指導は、中学生とはまた違って、一人ひとりを大人として扱い、自治を尊重するスタイルですが、校舎ですれ違いざまに明るい挨拶をしてくれる高等部生を見ていて、自分たちが通う学校への誇りと自治の尊さをいつも感じます。人数が増えて大変でしょうが、これからも教員が可能な限り足並みをそろえて日々の指導に取組む必要があると考えます。学友会長も、次年度に向けて初めて女子生徒が選ばれたと聞きました。明るい風通しの良い学校に向けてのますますの進化が期待できます。

国際理解教育の面では、高等部の国際交流プログラムはカンボジアへの研修など目を見張るものがあると感じます。留学を希望する生徒たちが増えているとの数字より、世界に目を向ける若い生徒たちの躍動感が感じられます。身近な仲間や地域の方へのことも勿論大事にしながら、やがては誰かのために力になれる、社会に奉仕できる、そんな一人ひとりが与えられた使命を自覚して羽ばたいていけるような土壌を、これからも大切にしてく学校であることを願っています。

まずは全体的に、共学化の完成年度、またＳＧＨ指定４年目である関西学院高等部の 2017 年度が、一層の飛躍の年であったことがうかがえます。アンケートの結果より、全体に肯定的な回答の割合が高いこと、そして特に、生徒の回答の、「３年生の選択授業の充実」「ＩＣＴ機器の充実」に、保護者回答の「多様な学習内容・学習形態に応じた施設・設備の充実」には群を抜いて肯定的な回答が圧倒的に多いこともその裏付けと言えます。

学習においては、大学との接続関係における情報提供に力を入れるとともに基礎学力の向上にも力を入れ、補習や英数の特別授業などきめ細やかな指導をしています。これら両面における生徒の満足度の高さが見られるのは素晴らしいことです。生徒数も増え、共学化が完成した今後も引き続き「きめ細やかさ」の充実を図られることを期待します。

人権教育にも力を入れ、「双方向性」「日常性」をキーワードに複数教科での連携としての人権講座や、外部から多岐にわたる分野での実践者を招いての取組など、参考にしたいと思います。保護者の、「高等部がいじめアンケートや人権講座を通じていじめ問題の把握と防止に取組んでいる」ことへの評価は高いです。しかし、「生徒自身が種々の人権問題についてより関心を持つようになったと家庭で感じる」という質問への回答は残念ながらアンケート全体の中でも肯定度が低いものでした。来年

度も引き続き人権教育に力を入れる計画であるとのことですので、人権問題を校内の問題から社会問題への関心につながるさらなる展開を期待します。これには、ＳＧＨ５年目となられる国際理解教育とも連動させ、国際基準での人権意識という観点も推進されることを期待します。

生活指導の中での制服指導において「プライドを持った着こなし」という呼びかけに共感します。押し付けではなく、生徒の内から生まれる自主的なマナーへの関心、これは先の人権問題にも通じるものであると思いますが、大人がヒントを与える中で生徒自らの気づきを促すもので、さらに言うならば、高等部が今年度も一層力を入れている「アクティブラーナー」を育てるＰＢＬを取り入れた学習環境の整備とも関連しているものと考えます。教室での学び、生活全般、生き方という学びにおいて、一層アクティブな学習者を育成されることと期待します。来年度よりＩＣＴ化がさらに進み、生徒一人一台の iPad 所持という新しいスタイルへの変化が始まることも、よき連動となることと考えます。

最後に、重点項目には含まれませんが、教員アンケートの「中学部との連携」に関しての回答に関して、中高部の会議や協議を進めている今後具体的な動きにつながることを望んでいます。

共学化が完成し、生徒へのキリスト教主義教育の浸透と実践が進展しています。今後は、キリスト教主義教育についての評価や実践の男女差を受け、男子生徒へのより効果的な働きかけが必要と思われます。

教育課程・学習指導については、関西学院大学への推薦制度に基づく教育課程を編成する中で、全生徒の基礎学力の定着と学力向上のための取組がなされていることが評価できます。大学入試改革が進む中で変化する関西学院大学、さらに社会が求める学力、特に英語力の向上に対応した取組の一層の充実が期待されます。また、進級・進学などに関する情報提供の状況についての肯定的評価に生徒と保護者の間に差が生まれています。進路選択の多様化を踏まえ、保護者へのより適切な説明と対応の充実が望まれます。

生徒指導に関しては、共学化完成年度に即した制服の着方などに関する多様な方法の導入と、安全面に関する丁寧な指導の展開が評価できます。一方、「守るべきルールやマナー」への否定的意見が生徒および教員とも一定数生まれています。今後も、ＳＮＳによるいじめ問題も含めた人権教育を推進するとともに、生徒への丁寧な説明の実施と教員間の共通理解を図ることが望まれます。

教育環境整備については、ＩＣＴ環境の大規模な整備とそれらを活用するためのアプリケーションの導入やアクティブラーニング型授業の研修の実施など、校務の効率化と授業改善を推進可能とした体制形成に優れています。この体制をもとに、生徒１人１台のタブレット端末の使用を踏まえたアクティブラーニング型授業・ＰＢＬ(Project Based Learning)型授業の推進とアクティブラーナーの育成が期待されます。

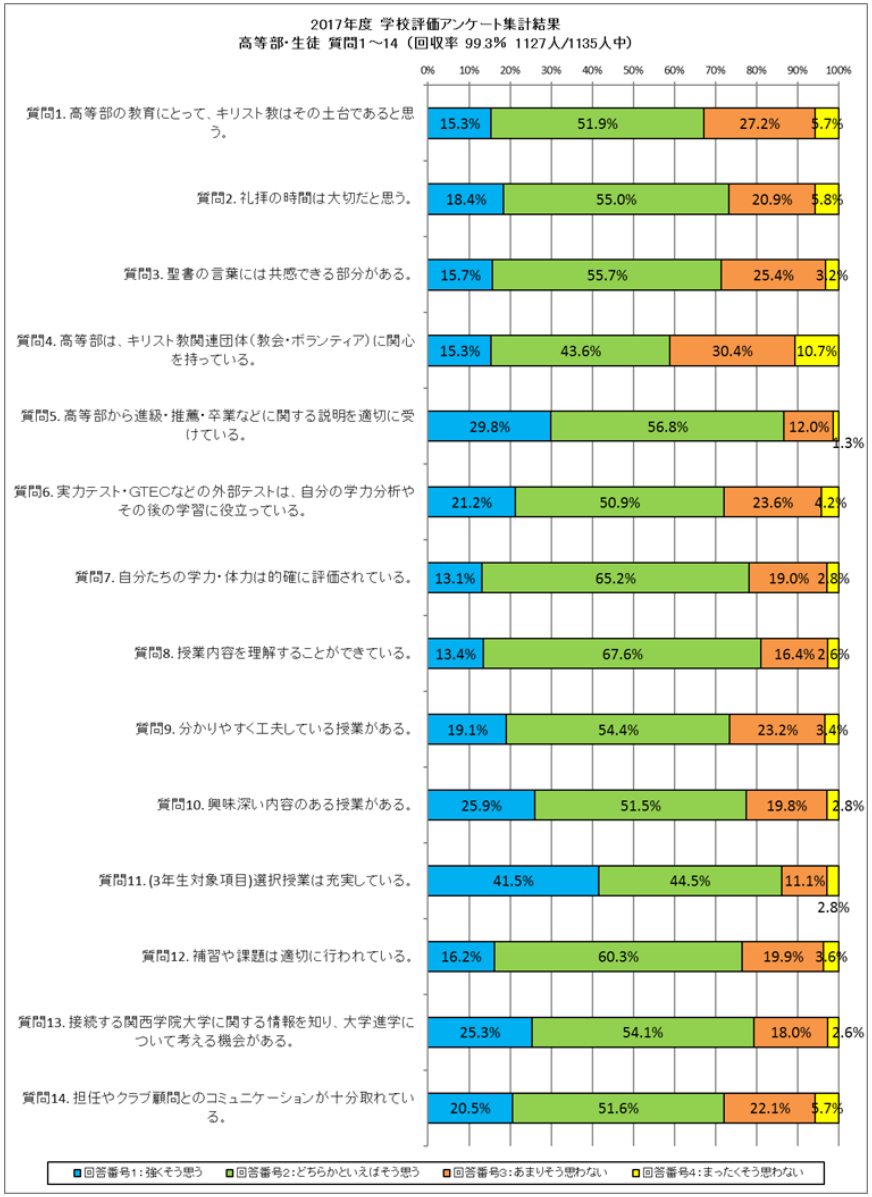
国際理解教育に関して、４年目となったＳＧＨの教育プログラムにおいて各種の国際交流プログラムが学校生活の様々な場で展開され、海外生活や留学への関心の向上につながっていることが高く評価できます。最終年度を迎える次年度においては、ＳＧＨ終了後にも国際理解教育を推進する体制が維持できるようプログラムをさらに充実させていくことが望まれます。

2017 年度の高等部の教育活動全体が、総合学園としての関西学院の一貫教育における中核として展開されていることが大変評価できます。そして、ともに中等教育を担う関西学院中学部および千里国際中等部・高等部との情報交換・連携を一層強化することによって、より大きな推進力となっていくと思われます。

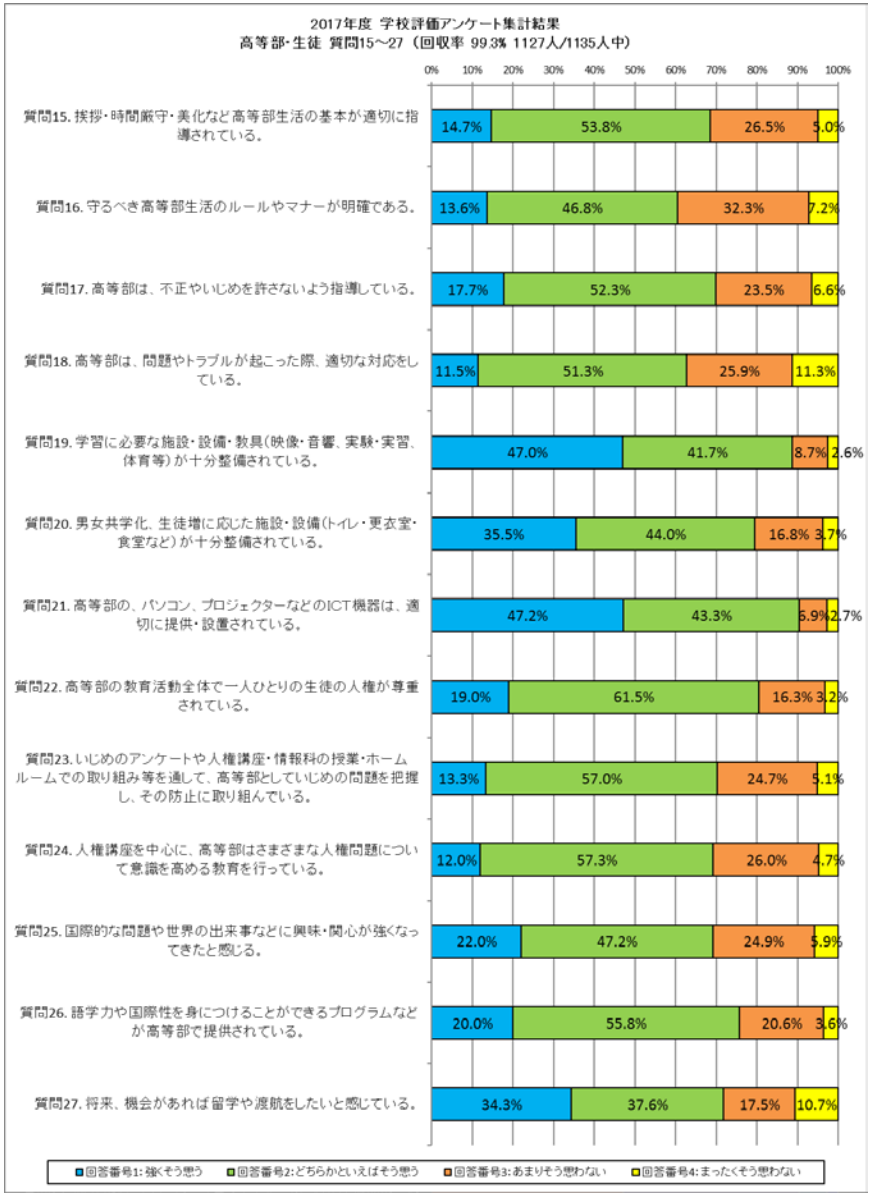
キリスト教主義教育を基本に、ＳＧＨ事業を中心とする国際化への取組に積極的に取組んでいる点が大変評価できます。さらに今年度完成年度を迎えた共学化については、教育設備の整備を順次進めており対応が進められています。一方で来年度の新入生から iPad の全員必携を導入することについて、十分な準備と適切な対応が進められるよう引き続き取組んでいくことが求められます。

2017 年度学校評価

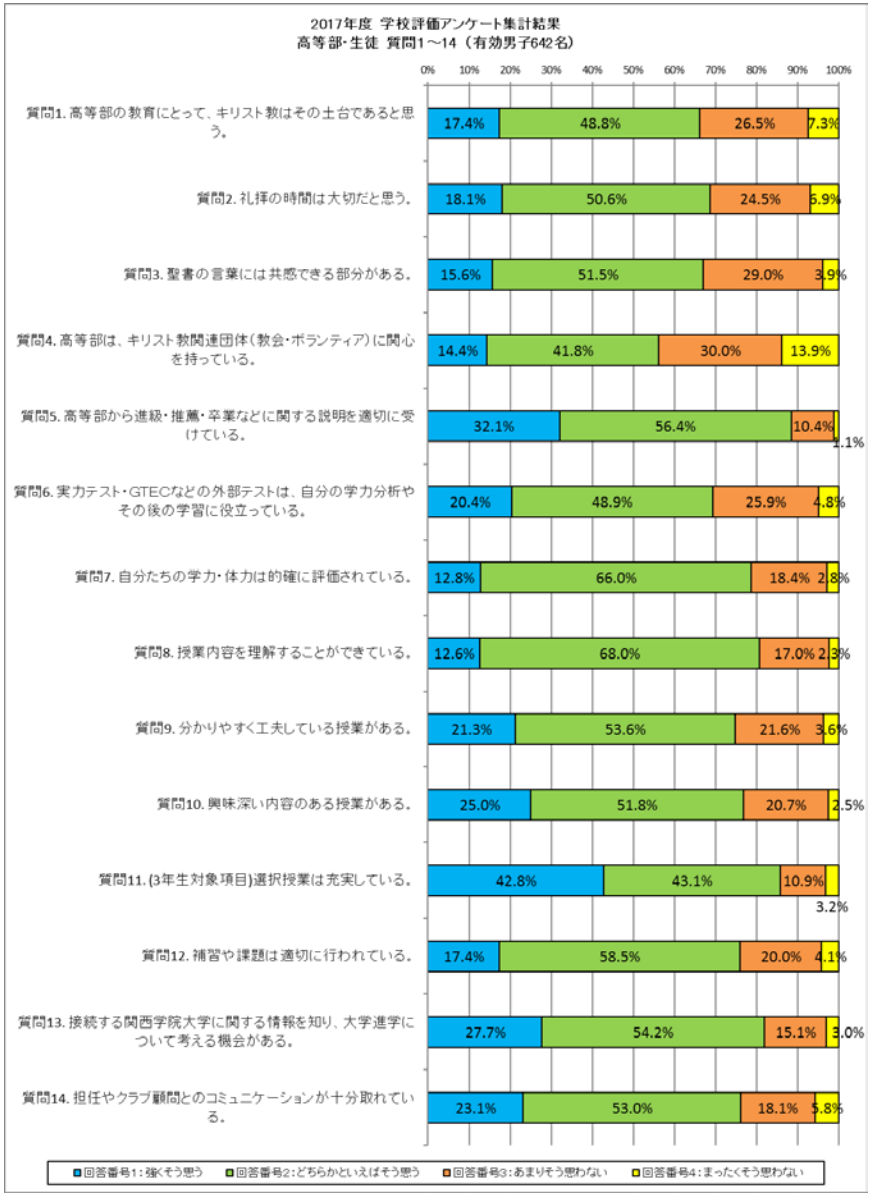
全校生徒　1～14



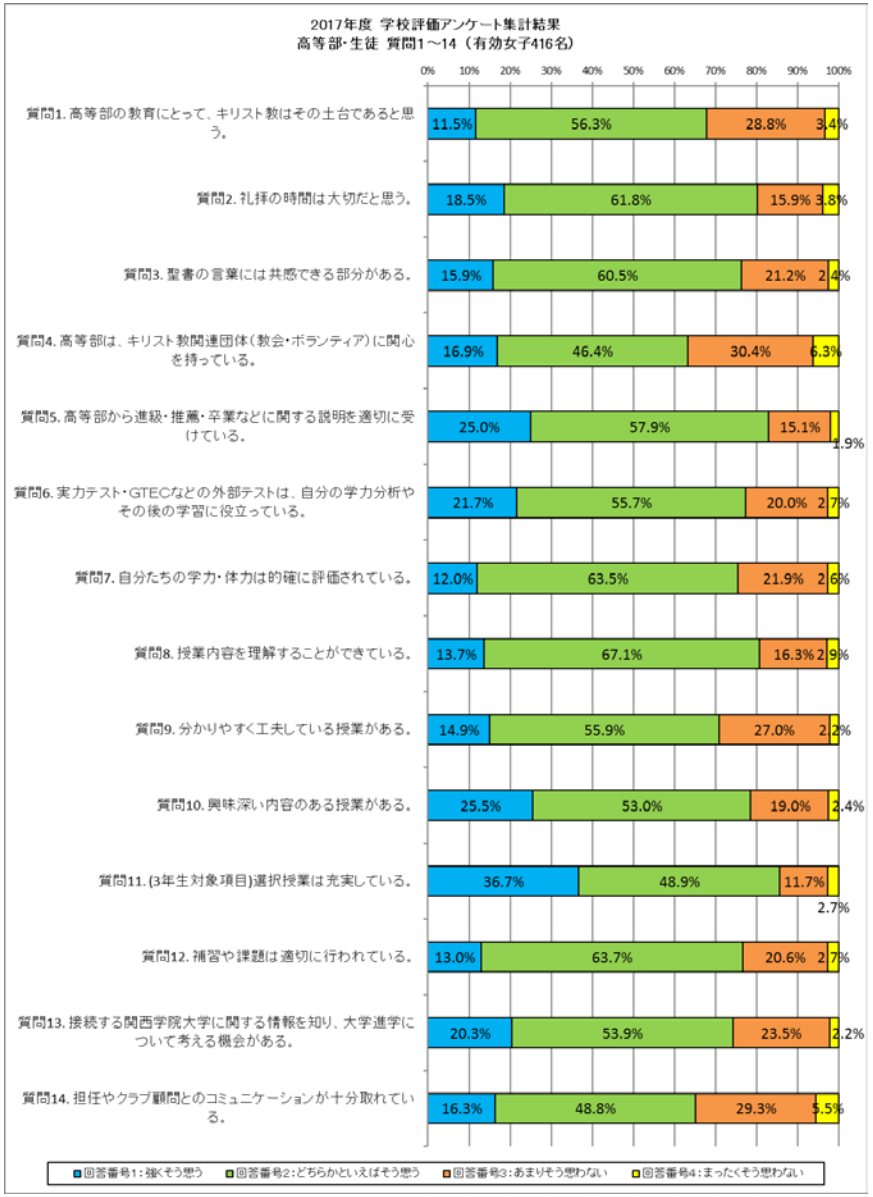
全校生徒　15～26



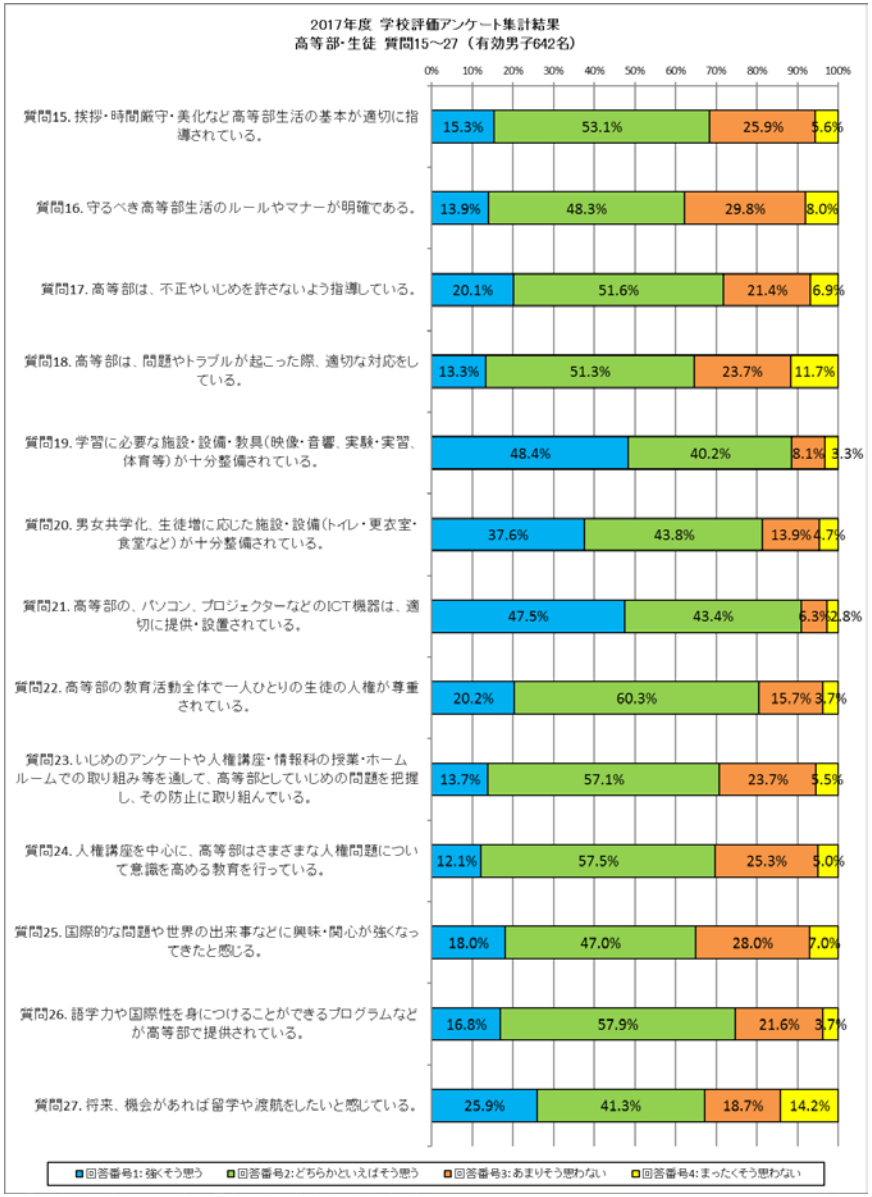
男子生徒(642 名)　1～14



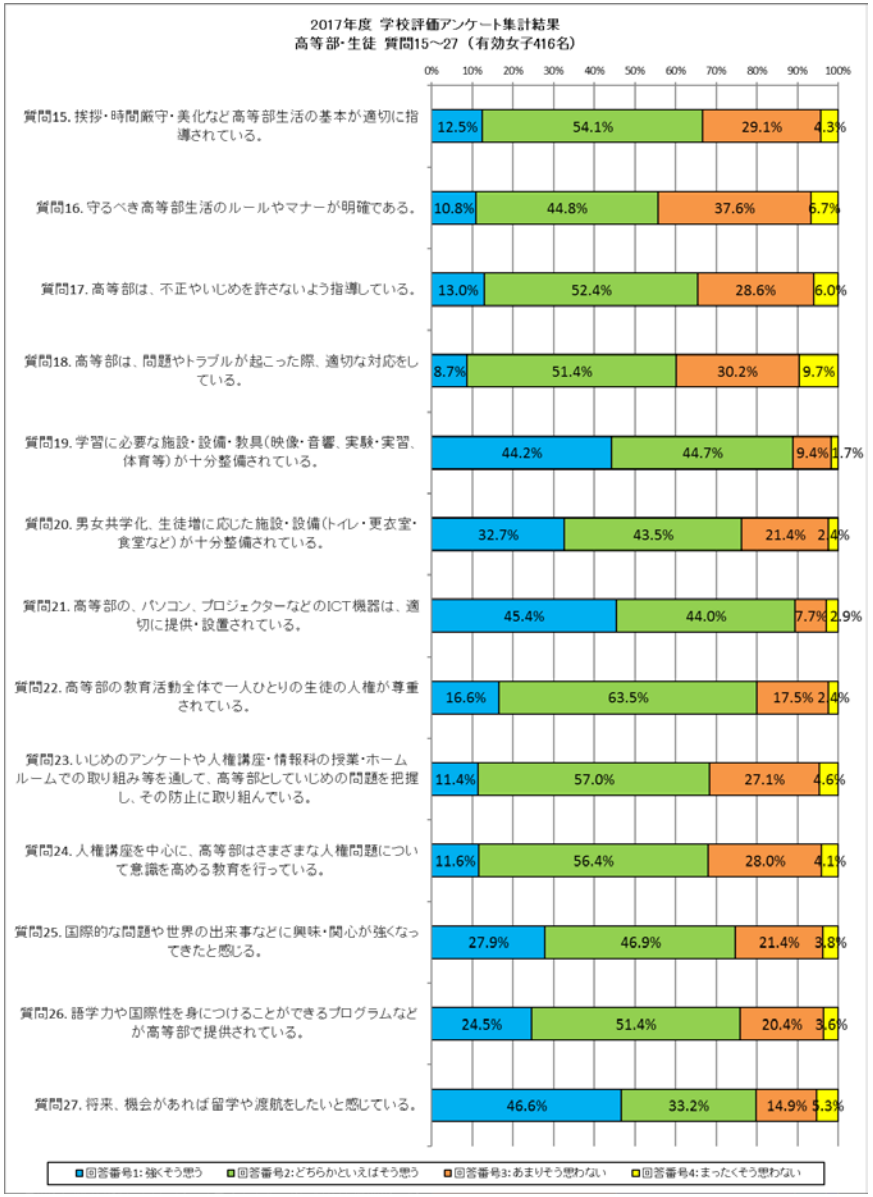
女子生徒(416 名)　1～14



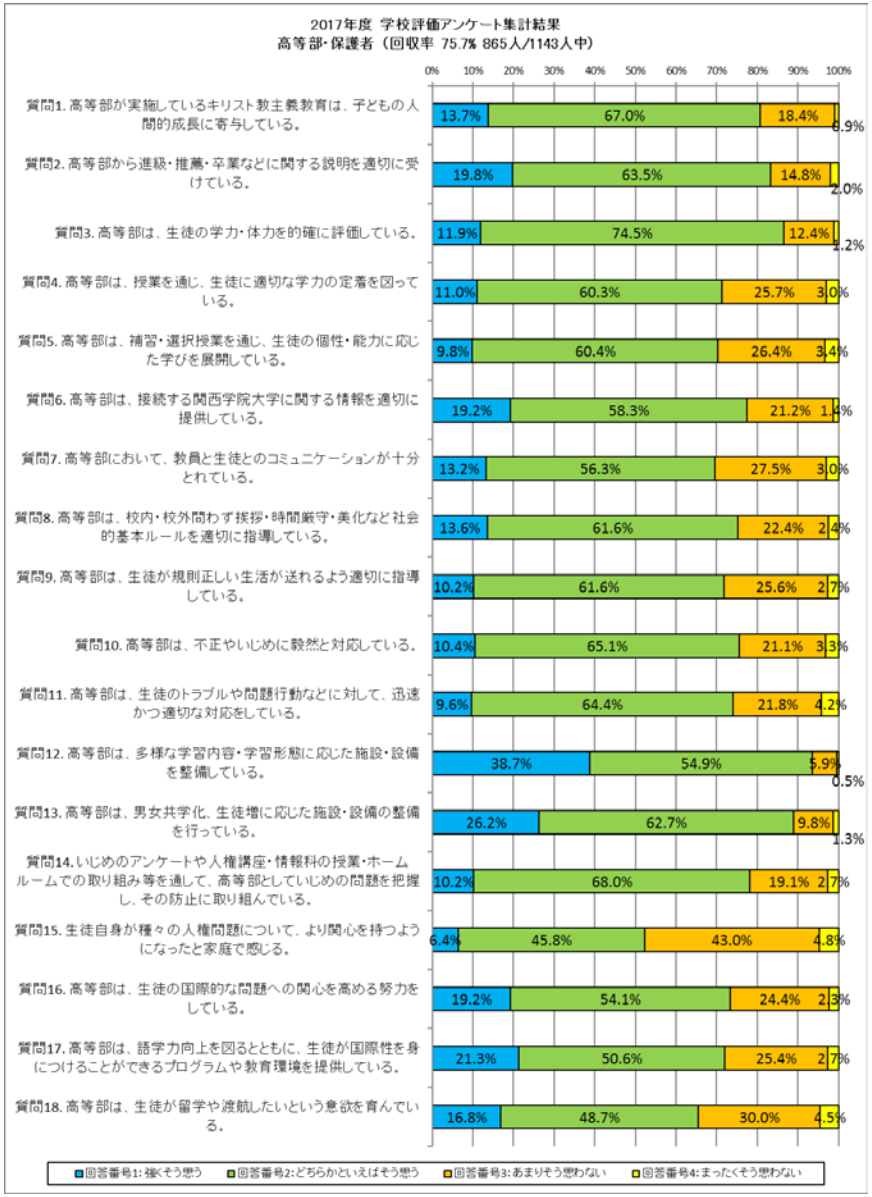
男子生徒(642 名)　15～27



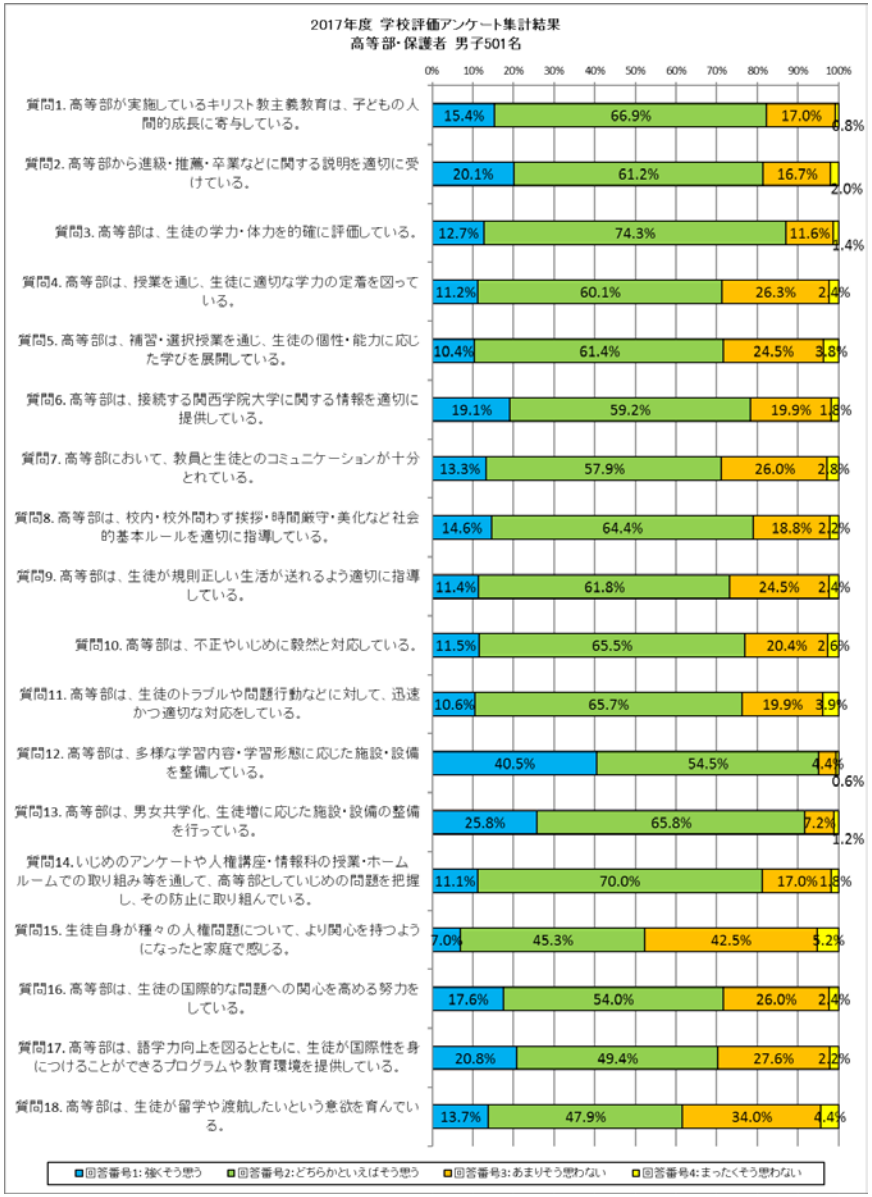
女子生徒(416 名)　15～27



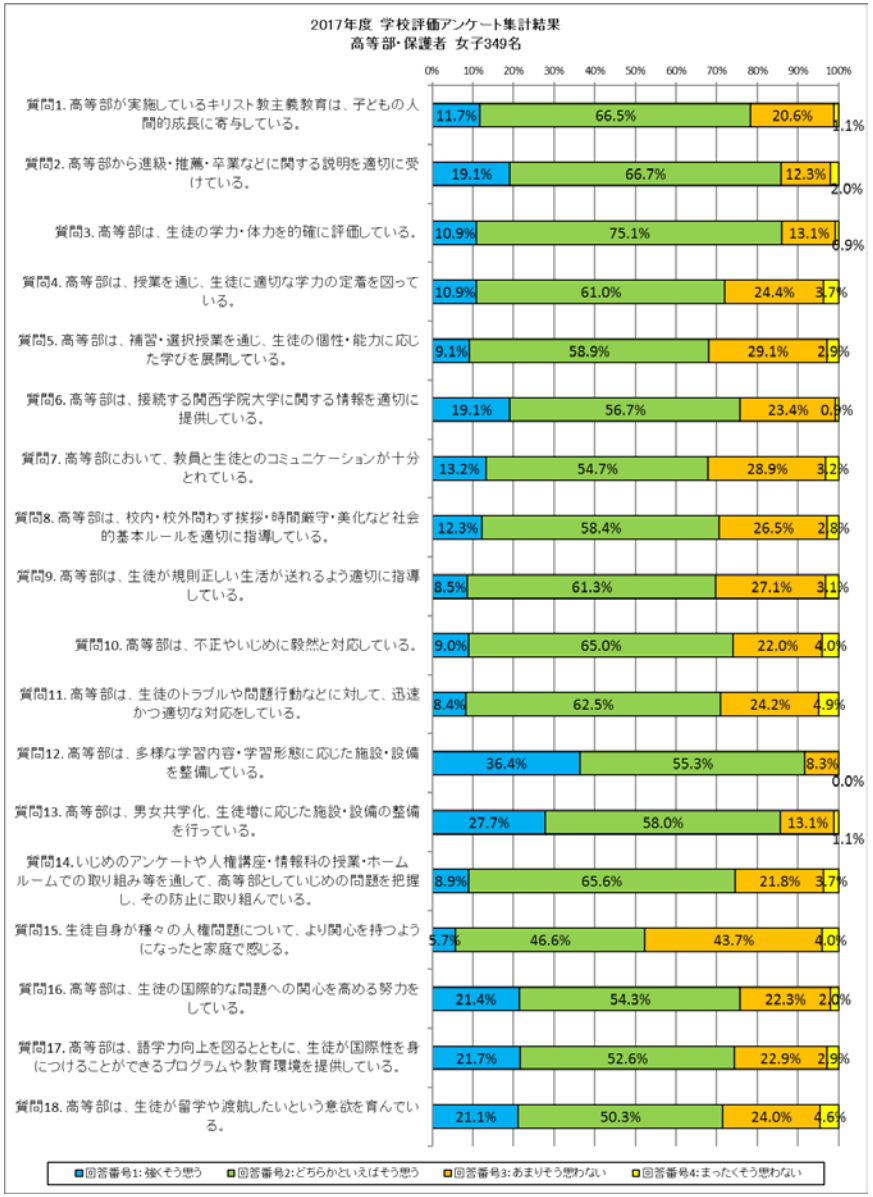
保護者 865 名


2017年度 学校評価アンケート集計結果
高等部・保護者（回収率 75.7% 865人/1143人中）
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
質問1. 高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している。
13.7% 67.0% 18.4% 0.9%
質問2. 高等部から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。
19.8% 63.5% 14.8% 2.0%
質問3. 高等部は、生徒の学力・体力を的確に評価している。
11.9% 74.5% 12.4% 1.2%
質問4. 高等部は、授業を通じ、生徒に適切な学力の定着を図っている。
11.0% 60.3% 25.7% 3.0%
質問5. 高等部は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。
9.8% 60.4% 26.4% 3.4%
質問6. 高等部は、接続する関西学院大学に関する情報を適切に提供している。
19.2% 58.3% 21.2% 1.4%
質問7. 高等部において、教員と生徒とのコミュニケーションが十分とれている。
13.2% 56.3% 27.5% 3.0%
質問8. 高等部は、校内・校外問わず挨拶・時間厳守・美化など社会的基本ルールを適切に指導している。
13.6% 61.6% 22.4% 2.4%
質問9. 高等部は、生徒が規則正しい生活が送れるよう適切に指導している。
10.2% 61.6% 25.6% 2.7%
質問10. 高等部は、不正やいじめに毅然と対応している。
10.4% 65.1% 21.1% 3.3%
質問11. 高等部は、生徒のトラブルや問題行動などに対して、迅速かつ適切な対応をしている。
9.6% 64.4% 21.8% 4.2%
質問12. 高等部は、多様な学習内容・学習形態に応じた施設・設備を整備している。
38.7% 54.9% 5.9% 0.5%
質問13. 高等部は、男女共学化、生徒増に応じた施設・設備の整備を行っている。
26.2% 62.7% 9.8% 1.3%
質問14. いじめのアンケートや人権講座・情報科の授業・ホームルームでの取り組み等を通して、高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる。
10.2% 68.0% 19.1% 2.7%
質問15. 生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる。
6.4% 45.8% 43.0% 4.8%
質問16. 高等部は、生徒の国際的な問題への関心を高める努力をしている。
19.2% 54.1% 24.4% 2.3%
質問17. 高等部は、語学力向上を図るとともに、生徒が国際性を身につけることができるプログラムや教育環境を提供している。
21.3% 50.6% 25.4% 2.7%
質問18. 高等部は、生徒が留学や渡航したいという意欲を育んでいる。
16.8% 48.7% 30.0% 4.5%
回答番号1: 強くそう思う
回答番号2: どちらかといえばそう思う
回答番号3: あまりそう思わない
回答番号4: まったくそう思わない

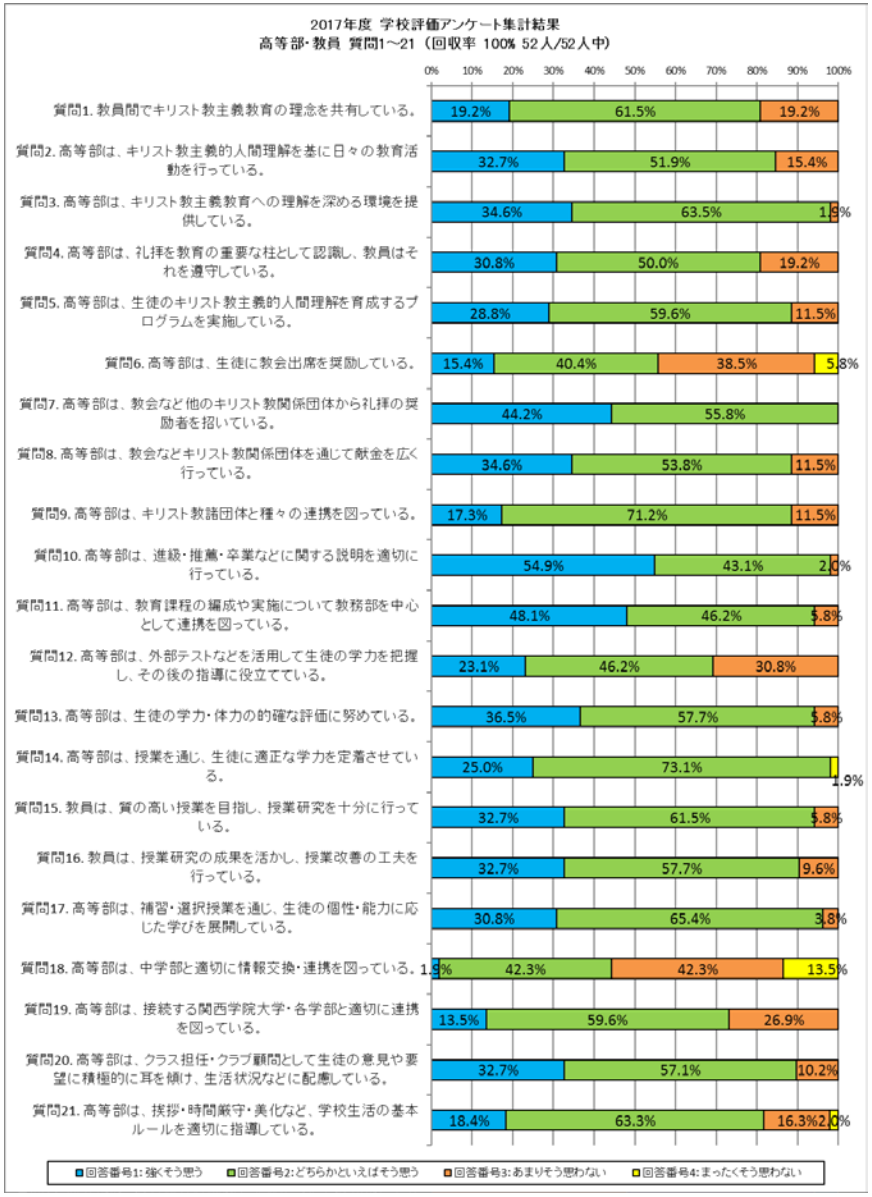
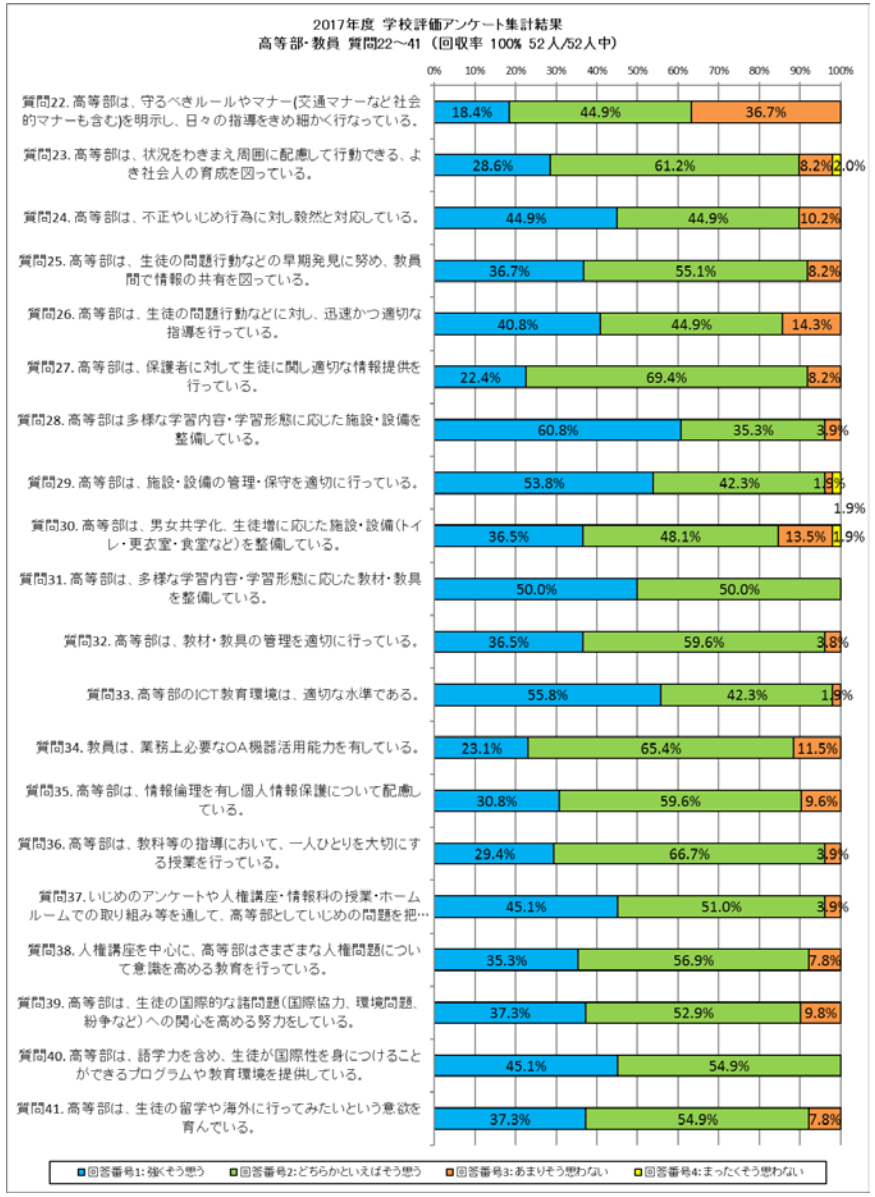
保護者　男子 501 名



保護者　女子 349 名



教員　1～21



教員　22～41